



図1 時津町茶屋跡周辺

江戸時代の時津港の波止場は、現在の八幡神社前の商店街の辺りですが、二十六聖人の時代はもっと内陸の方であったと推測されています。

現在の「日本二十六聖人上陸の地碑」から国道を通り、商店街から八幡神社、さらには、茶屋跡へ至る道路の内、商店街から八幡神社の前を通り茶屋跡へ至る道路は、江戸時代の浦上街道でした。



図2 時津町長崎市境古道周辺

茶屋跡を過ぎると、街道は鳥越橋にかかりますが、当時、橋はなく、二十六聖人は飛石伝いに渡りました。

街道は、継石（さばくさらかしいわ）から、元村団地の方へ入りその後、再び国道に出て、長崎市と時津町の境界標識の所から街道の最大の難所打坂峠への小道に入りますが、この付近はかつての街道の面影を良く残しています。



図3 長崎市住吉神社周辺

この付近も、明治以降の開発ですっかりその景観が変わってしまいました。街道は、六地藏から住吉神社の方へ入り、さらにチトセピアの横を通ると、城の越でした。この城の越は、天領と大村藩領の境界で、1691年（元禄4）ここを通った出島商館医ケンペルは、石造の境界標識があることをその「江戸参府紀行」のなかに記述しています。